

2. 十勝の発展と環境の変化

湿地の減少と生き物

地域産業
環境

第1章 十勝の平野や川ができるまで

第2章 先史時代と川

第3章 アイヌ文化と川

第4章 十勝開拓と川

第5章 発展、今、そして未来へ

用語

さくいん



十勝川下流部の地形図。左が昭和21年(1946)発行で右が昭和58年(1983)発行のもの。湿地(■)がはっきりと減っている。

(国土地理院所蔵・刊行の1/5万地形図(浦幌)を使用)

明治から始まった十勝内陸の開拓、そして、現代まで続くさまざまな治水工事のおかげで、洪水の被害は減り、畑や住宅地など人が暮らせる場所がどんどん広がり、農業を始めいろいろな産業も発達してきました。しかし、こうした発展は、一方で自然環境の大きな変化をもたらしました。

例えば、新水路工事などによって十勝川の流れをよくし(p190)、土地の水はけを良くすることで、多くの湿地が畑や住宅地に変わってきました。人の暮らしにとって、湿地はかなり迷惑な場所です。しかし、自然の中では生き物が豊かに暮らす場所でもありました。(p185)



ネムロコウボネ



エゾベニヒツジグサ



ヒシモドキ

レッドデータブックにのっている十勝の水草の例。

少なくなった水草たち

ヨシ(アシ)やガマ、ミクリやカヤツリグサなど、水辺や水の浅いところに生える草を水草といいます。中には、ヒシのように、静かな水面にうかびたよう草もあります。

こうした水草は、その多くが湿地に生えている草です。湿地が減るといことは、そのまま、こうした水草の数が減ることもありました。

絶めつのおそれがある生き物をリストにした、国の「レッドデータブック」には、ネムロコウボネ、エゾベニヒツジグサ、ヒシモドキなど、十勝にある水草もたくさんっています。

タンチョウなど湿地に暮らす鳥もいる

湿地を好む鳥たちもいます。ガンやカモの間には、静かな沼を好むものが多くいます。

マガンやヒシクイといったガンの仲間は、春に南から北へ、秋に北から南へとわたる途中に、十勝の沼によって一休みします。

また、釧路湿原で有名なタンチョウは、春には十勝にもやってきて、湿原のヨシ(アシ)草原の中で卵を産み、子育てをします。わずかながら冬ごしするものもいます。

これらの鳥たちにとって、湿地はとても大切な場所なのです。

ただ、こうした鳥たちは、畑の作物を食べてしまうこともあり、増えた場合には問題が起きることもあります。



(上)タンチョウ。アイヌ語で「サロルンカムイ」。意味は「ヨシ(アシ)原内にいる神」。



(右)ヨシ(アシ)原の中で、巣を作るタンチョウ。

1 レッドデータブック：絶めつのおそれのある野生生物について記載したデータブックのこと。もとは国際自然保護連合が作成し、その後、各国や団体によっても作成されている。日本では国(環境省)が作成していて、北海道でも作られている。